

2015年 アメリカ学会第49回年次大会（ICU大会）プログラム

（アメリカ学会 HP 上で参加登録をお願いします）

1. 開催日 2015年6月6日（土）、6月7日（日）

2. 会場 国際基督教大学

〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2

交通アクセス：<http://www.icu.ac.jp/about/access/index.html>

キャンパスマップ：http://www.icu.ac.jp/about/docs/icu_map2013_3.pdf

会場校連絡先 大西 直樹（電話：0422-33-3217 E-mail: onishi@icu.ac.jp）

3. 受付 大学本館1階ホール

4. プログラム（詳細は大会会場で配布する【大会要項・報告要旨】をご覧ください。）

第1日 6月6日（土）

午前の部 自由論題 9:15～11:45 本館201～204

【自由論題A 宗教・福祉】

司会：大類 久恵（津田塾大学） 討論：増井 志津代（上智大学）

Satomi MINOWA 箕輪 理美（デラウェア大学・院）“Gender and Power in the Spectacles of Antebellum Spirit Mediumship”

相川 裕亮（慶應義塾大学・院）「アメリカ反共主義の一側面：大衆伝道者ビリー・グラハムの事例から」

宮城 幹夫（国際基督教大学キリスト教と文化研究所・研究員）「終末信仰を内在する社会正義神学：米国統治下に於ける沖縄プロテスタント基督者（1945-1972年）」

向井 洋子（琉球大学・講）「占領期沖縄におけるアメリカ的な社会福祉——レイ神父の粉ミルク普及活動を通して」

【自由論題B 人種・エスニシティ】

司会：大辻 千恵子（都留文科大学） 討論：大森 一輝（北海学園大学）

児玉 真希（東京大学・院）「奴隷所有者としての自覚とその継承：トマス・ラフィン家の事例から」

大八木 豪（東京大学・研究員）「1990年代から2000年代初めのアジア系アメリカ人と戦争の記憶の政治」

竹沢 泰子（京都大学）「“Race”と“Class”——日系アメリカ人研究にみる翻訳と解釈をめぐって」

【自由論題C 植民地思想・軍政】

司会：和田 光弘（名古屋大学） 討論：金井 光太郎（東京外国語大学）

鱈淵 秀一（ハーバード大学・院）「ウィリアム・ペンと王政復古帝国——ペンシルヴァニア植民の知的起源」

三好 文（一橋大学・院）「第一次世界大戦期のアメリカ軍の国内性病対策と女性達——アメリカ赤十字社看護婦を中心に」

部谷 直亮 (ガバナンスアーキテクト機構・研究員) 「ゴールドウォーター・ニコルズ法体制下の政
軍関係：米国のパナマ侵攻を事例に」

【自由論題 D 表象・メディア】

司会：有馬 哲夫 (早稲田大学) 討論：板津 木綿子 (東京大学)

白木 三慶 (一橋大学・院) 「*Let Us Now Praise Famous Men* における写真と文章の関係をめぐって」

河原 大輔 (九州大学) 「新自由主義下ハリウッドにおけるデジタル・シネマ技術の拡大」

志柿 浩一郎 (東北大学) 「アメリカ初の女性 FCC 委員フリーダ・ヘノックとアメリカの放送」

昼食休憩 11:45～12:45

理事会・評議員会 11:50～12:45 本館 262

清水博賞授賞式 13:00～13:10 D 館講堂

午後の部 D 館講堂

**Symposium 1 “‘Americanized’ Higher Education in the Global Age”
13:15～15:45**

Chair: Yujin YAGUCHI 矢口 祐人 (University of Tokyo 東京大学)

Speakers:

Anri MORIMOTO 森本 あんり (International Christian University 国際基督教大学)
“From Colony to Province: Liberal Arts Education in a Global Age”

Tatsuro SAKAMOTO 坂本 辰朗 (Soka University 創価大学) “A Puzzle of ‘Americanized’
Higher Education: A Historical and Comparative Perspective”

Katsunori YAMAZATO 山里 勝己 (Meio University 名桜大学) “The Birth of a
University: The Background and Some Problems Concerning the Establishment of
the University of the Ryukyus”

Commentator: Paula RABINOWITZ (ASA / University of Minnesota)

Symposium 2 「ヘイトクライムとアメリカ」 15:55～18:25

司会・討論 貴堂 嘉之 (一橋大学)

講師 中條 献 (桜美林大学) 「ヘイトクライムと歴史コンテクストを考える」

前嶋 和弘 (上智大学) 「ヘイトクライムをめぐる政策と立法過程」

新田 啓子 (立教大学) 「侮蔑の空隙を求めて——言語行為論再考」

樋口 直人 (徳島大学) 「日本型排外主義再考——東アジアの特質を考える」

懇親会 18:40～20:40 大学食堂

.....
第 2 日 6 月 7 日(日)

部会・Workshop 午前の部 9:30~12:00 (本館 203, 213, 215)

【部会 A Census and America: The Past and Present of the Statistics on Race and Ethnicity】

Chair and Commentator: Yuko MATSUMOTO 松本 悠子 (President, JAAS / Chuo University
アメリカ学会会長・中央大学)

Speakers:

Margo ANDERSON (University of Wisconsin-Milwaukee) “The Role of the Census in American History”

David PEMBERTON (US Census Bureau) “The Demand for Small Area Data and the Coming of the American Community Survey”

Miya SHICHINOHE-SUGA 菅 (七戸) 美弥 (Tokyo Gakugei University 東京学芸大学)
“Recounting International, Interracial, and Multicultural Families among Japanese Immigrants through Census Manuscript Population Schedules”

【部会 B 愛国の語り方、反戦の唱え方——アメリカの戦争をめぐる文学者・知識人の言説】

司会 後藤 和彦 (立教大学)

報告 大西 直樹 (国際基督教大学) 「対インディアン戦争におけるピューリタンの言説」

奥田 暁代 (慶應義塾大学) 「米西・米比戦争と南部黒人指導者——サットン・E・グリッグスの政治小説から」

越智 博美 (一橋大学) 「動員をめぐる言説——第二次世界大戦と文学者」

討論 三牧 聖子 (関西外国語大学)

【Workshop A Wars of the Twentieth Century and Beyond I: Wars and Minorities】

Chair and Commentator: Toru SUZUKI 鈴木 透 (JAAS / Keio University 慶應義塾大学)

Speakers:

Paula RABINOWITZ (ASA / University of Minnesota) “The Fathers’ Secrets”

Greg ROBINSON (OAH / Université du Québec à Montréal) “The Internment of Indonesians in the United States: An Untold Story”

Yuko ITO 伊藤 裕子 (JAAS / Asia University 亜細亜大学) “The Bases and the Changing Historical Recognition: A View on the United States-Philippine Relations during the Cold War”

Commentator: Dongshin YI (ASAK / Seoul National University)

昼食休憩 12:00~13:30

分科会 12:10~13:25 (内容については下記「分科会のご案内」をご参照ください。)

総会 13:30~14:00 本館 262

部会・Workshop 午後の部 14:10~16:40 本館 203、204、213、215

【部会 C 第三政党をめぐる動向の検証】

司会 中山 俊宏 (慶應義塾大学)

報告 細野 豊樹 (共立女子大学) 「第三政党候補が善戦した最近の事例の分析」

西川 賢 (津田塾大学) 「第三政党とは何なのか：理論・仮説・実証」

飯田 健 (同志社大学) 「2008年大統領選挙における「ペロー」への投票」

討論 岡山 裕 (慶應義塾大学)

【部会 D ベトナム戦争終結後 40 年——米越関係の現在】

司会 藤本 博 (南山大学)

報告 麻生 享志 (早稲田大学) 「1.5 世代から 2 世代へ——ベトナム系アメリカ文化の現在」

佐原 彩子 (大月短期大学) 「米越関係の狭間で紡がれる物語：VAOHP の取り組みから考察するベトナム系アメリカ人コミュニティ」

五島 文雄 (静岡県立大学) 「中国の台頭と現在の米越関係——ベトナムの視点から」

討論 生井 英考 (立教大学)

【部会 E LGBTQ とアメリカ】

司会 本合 陽 (東京女子大学)

報告 兼子 歩 (明治大学) 「同性婚運動と現代アメリカ・リベラリズムの限界」

藤田 淳志 (愛知学院大学) 「エイズ・アクティヴィズムから結婚の平等運動へ——アメリカ演劇作品を通して」

中村 美亜 (九州大学) 「アイデンティティ・ポリティクスの先にあるものは？」

討論 清水 晶子 (東京大学)

【Workshop B Wars of the Twentieth Century and Beyond II: Wars and Immigration】

Chair: Takayuki TATSUMI 巽 孝之 (JAAS / Keio University 慶應義塾大学)

Speakers:

Rachel Ida BUFF (ASA / University of Wisconsin-Milwaukee) “Pacific Transits: Immigrant Rights and 20th Century Circuits of Empire”

Satoshi NAKANO 中野 聡 (JAAS / Hitotsubashi University 一橋大学) “Between a Single Story and the Different Truths: Filipino Veterans of World War II, 1941-2015”

Hyewon SHIN (ASAK / Korea University) “Academic Novels and American Higher Education”

Commentator: Fuminori MINAMIKAWA 南川文里 (JAAS / Ritsumeikan University 立命館大学)

5. 注意事項

- 1) 大会参加登録は、当学会ホームページの大会参加登録ページ上で5月7日までにお願い致します。学会HPの「第49回年次大会参加登録のお願い」ページをご覧ください。
- 2) 懇親会の参加には事前の申し込みが必要です。大会参加登録ページでお申し込みのうえ、懇親会費6,000円を5月7日までにご納入ください。払い込まれた懇親会費はいかなる事情があってもお返できませんので、ご注意ください。
- 3) 年会費の当日払いは受け付けられませんのでご了承ください。
- 4) 非会員の大会参加費は1,000円です。会場受付にてお支払いください。
- 5) 昼食：6月6日（土）、7日（日）ともに、「大学食堂」をご利用いただけます。なお、大学周辺にはコンビニエンス・ストアはありません。
- 6) 第1日（6月7日）の理事会・評議員会出席予定者には、弁当の注文が可能です。希望者は大会参加登録ページからお申込みのうえ、5月7日までに代金（1,000円、お茶含む）をご納入ください。
- 7) 会場までの交通アクセスは、国際基督教大学HPをご覧ください。宿泊や交通手段の確保も各自でお願いいたします。

6. 会場案内

受付	本館1階ホール
書店等出店	本館2階ラウンジ
会員用控室	本館215
本部スタッフ・役員控室	本館265
外国人ゲスト控室	本館206

6月6日（土）

午前 自由論題	本館201～204
昼食時 理事会・評議員会	本館262
午後 授賞式・シンポジウム1・2	D館（ディッフェンドルファー記念館）講堂

懇親会	大学食堂
-----	------

6月7日（日）

午前 部会およびワークショップ	本館203、204、213、215
昼食時 分科会	本館106、107、108、115、151、155、157、159、160、167
午後 総会	本館262
部会およびワークショップ	本館203、204、213、215

第49回年次大会 分科会のご案内 6月7日（日）12:10～13:25

* 会場はすべて本館1階の教室です。部屋割りは参加登録者数を見て決定いたします。

1. 「アメリカ政治」 責任者：西山 隆行（成蹊大学）taka1765@gmail.com

報告1：石川 葉菜（日本学術振興会特別研究員(PD, 慶應義塾大学)）「アメリカの連邦制と三権

分立制の交錯点：特区認可権の運用の発展」

報告 2：松本 明日香（日本国際問題研究所）「米国・キューバ国交正常化交渉：票田、争点、アクターから」

2015 年度のアメリカ政治分科会は、内政と外交、それぞれについて、最新の研究報告を行っていただく。石川会員は、特区認可権についての検討を通して、アメリカの連邦制と三権分立制の交錯について解明する。一般に、執政府が、連邦政府の他の二権である立法府と司法府の協力抜きで、単独で政策改革を実施するのは困難だと理解されている。しかし、現代の執政府は、しばしば、他の二権ではなく州政府と協力し、特区認可権を利用することで、公共政策改革を進めている。執政府がいかにしてこの手段を獲得していったかが解明される予定である。松本会員は、米国・キューバ国交正常化交渉について検討する。1961年に米国がキューバとの国交を断絶してから50年以上経つ今日、オバマ大統領は国交正常化に向けて動きだしている。どのような経緯で、なぜいま正常化に動き出したのか？共和党・民主党の票田としてのエスニック分布、通商・安全保障・人的交流の変化および内外における主要アクターの動向から分析する。

2. 「アメリカ国際関係史研究」 責任者：藤本 博（南山大学）hiroshif@nanzan-u.ac.jp

報告：水本 義彦（獨協大学）「ニクソン政権のベトナム政策とタイ、1969－1973年」

2015年はベトナム戦争終結40周年にあたる。本年度はベトナム戦争史を対象に水本義彦氏に報告をお願いする。本報告は、先行研究で十分な考察がなされていない、ベトナム政策をめぐるニクソン政権とタイ政府の同盟関係を分析する。報告では特に、①軍事基地の提供と南ベトナム、ラオスへの正規・非正規軍の派兵によって、タイ政府はニクソン政権がベトナム化政策を推進する上で他国には代替できない重要な役割を担っていたこと、②しかし反面、ニクソン・ドクトリンの発表や、米上院外交問題委員会による米タイ同盟関係の実態追及、タイ「傭兵」批判によってタイ政府がニクソン政権の信頼性に疑念を抱くようになったため、両国の関係の根底に強い不信感が存在していたこと、を明らかにする。水本氏には、報告との関連でニクソン大統領図書館の史料状況についても報告いただく予定である。本報告をもとに、アメリカとタイ政府（広くはアジア諸国）の同盟関係を射程に入れたベトナム戦争史研究・冷戦史研究の意義と可能性について活発な議論を期待している。

3. 「日米関係」 責任者：浅野 一弘（札幌大学）k-asano@sapporo-u.ac.jp

報告：吉田 真広（駒澤大学）「日本の貿易・対外経済の転換点と対米関係－対米関係を中心に形成された対外構造－」

現在、日本の対外経済関係の国際収支上の特徴は、貿易収支赤字基調の定着、所得収支黒字の増大、経常収支黒字逡減であり、連動する資本収支上の特徴は、巨額の対外投資である。その契機は、80年代の米国を中心とした世界経済の構造転換にある。本報告の課題は、その具体像を提示し、経済的意味について論じることである。

戦後日本の対外構造は、①高成長期：素材型産業における米国への集中豪雨的输出、それに伴う貿易摩擦、②低成長期：技術集約型産業への重心転換、中心輸出先としての米国、摩擦回避と連動した現地生産の始動、③80年代半ば以降：内需大国化、日米関係と結びついたマクロ構造転換の推進、と展開してきた。現在、③の構造が一層深化している。この構造を導いた最大要因は資本・金融の自由化であり、それはドルを主力とした過剰資本創出によってもたらされた。報告ではそのメカニズムを提示する。

4. 「経済・経済史」 責任者：名和 洋人（名城大学）nawa@meijo-u.ac.jp

報告：阿部 容子（北九州市立大学）「米国知的財産制度の変容と国際的な制度調和化における戦略」

資本主義の発展に伴い整備された制度体系の一つとして知的財産制度が挙げられる。知的財産は「競争力」の源泉としてますます重視されているが、「コモンズ」として捉えられるものでもある。1980年代以降GATT・WTO、FTAにおける交渉やWIPO（World Intellectual Property Organization：世界知的所有権機関）において知的財産制度の国際的調和が進められているが、「調和化」のベースを構築したのは米国である。米国における知的財産制度の整備は産業特性や市場の競争状態の異なる産業の位置づけと相互作用が影響する。報告では1980年代に米国で進められた包括的な知的財産制度の整備と、米国知財制度を取り巻く環境の変化による2000年代以降の米国特許法改正をめぐる議論を取り上げ、知的財産の活用における国家と企業の相互関係の変容について検討する。

5. 「アジア系アメリカ研究」 責任者：野崎 京子（京都産業大学） nozaki@cc.kyoto-su.ac.jp

報告：池野 みさお（津田塾大学）「ロサンゼルス暴動とコリア系アメリカ再考——人種、言語、文学の視点から」

1992年のロサンゼルス暴動の特異性は、アフリカ系の男性 Rodney King に激しい暴行を加えた4人の警察官の無罪放免がきっかけでありながら、暴徒たちの矛先が主にコリア系の商店に向けられたことである。背後には、多文化社会アメリカの抱える複雑な人種問題が絡んでおり、Rodney King 事件のわずか2週間後にアフリカ系の少女 Latasha Harlins がコリア系女性店主に銃殺される事件が起きたことも暴動の一因とされる。ロス暴動がコリア系アメリカ人に与えた影響は深く、それはバークレイの文学者 Elaine Kim を突き動かし、その余波は Chang-rae Lee のデビュー作 *Native Speaker* や Ty Pak の短編 “The Court Interpreter” にも現れている。2013年には Brenda Stevenson による *The Contested Murder of Latasha Harlins* が出版されるなど、20年の時を経てもおこの事件の記憶が薄れることはない。本発表では、人種、言語、文学の視点から、ロス暴動とコリア系アメリカの問題について再考したい。

6. 「アメリカ女性史・ジェンダー研究」 責任者：松原 宏之（横浜国立大学）

hiro-m@ynu.ac.jp

報告：高内 悠貴（イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校・院）「性政治と帝国主義の言説：第2次世界大戦後の合衆国における LGBT 史再考」

同性婚を法制化する動きの急速な広がりが示すように、近年の合衆国において性的多様性の称揚はアメリカ的価値として受容されつつあるように見える。20世紀後半の合衆国で LGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）の政治運動はいかに主流化を果たし、そこでのどのようなジェンダーや人種、階級の政治が働いていたのか。本報告は、1980年代に登場した LGBT 史において常に主要な論点であったこの問いを、国際的な冷戦構造の文脈において考察する。とりわけ、20世紀後半の LGBT 運動の誕生と成長に大きな影響を与えた第2次世界大戦と冷戦初期の反共主義政策が、太平洋の両岸（カリフォルニアと沖縄）にもたらした異なる帰結に注目したい。一国史の枠組みを出て、合衆国の LGBT 史を考察するとき、合衆国内での LGBT 運動の主流化と国外での帝国主義の間に、どのような関係を見ることが出来るだろうか。太平洋からアメリカの性政治を考察する可能性と意義を議論したい。

7. 「アメリカ先住民研究」 責任者：佐藤 円（大妻女子大学） mdsato@otsuma.ac.jp

報告：根元 慎太郎（立教大学・院）「先住民民族自決運動と部族大学の誕生—シンテ・グレシユカ大学の事例から」

アメリカ合衆国にはアメリカ先住民部族によって管理・運営されている高等教育機関の「部族大学」が37校存在する。その大部分は1970年代に創立され、その誕生は当時の民族自決運動と連邦政府の政策改革の成果であるとも言える。本発表ではアメリカ先住民の民族自決運動における教育の目的意識に着目する。運動と政策の両側面から教育改革に関する提言内容を分析し、実際に教育

現場にもたらされた改善内容を考察する。その考察を通じて民族自決における教育の位置付けとその重要性を明らかにしたい。なお本発表の分析は、サウスダコタ州のローズバッド保留地にキャンパスを置くシンテ・グレシュカ大学を事例としている。

8. 「初期アメリカ」 責任者：石川 敬史（東京理科大学） takafumi@rs.kagu.tus.ac.jp

報告：田宮 晴彦（水産大学校）「ハミルトン体制と大西洋間技術交流」（仮）

アレグザンダー・ハミルトンの「製造業に関する報告書」においては、イギリスからの熟練職人を早期に大量に移入することが、アメリカ合衆国における大規模製造業確立の鍵として論じられている。しかし、ハミルトンはどのような成算のもとに、このような形での技術移転が可能だと考えていたのだろうか。本報告では、ハミルトンの補佐官たるテンチ・コックスの「工業調査」より、建国期合衆国製造業における熟練職人確保の経路・手段を検討し、併せて、同時期のイギリスにおける熟練職人と工場主たちの労使構想に注目することで、大西洋を横断する人的・技術的交流と「ハミルトン体制」における製造業の関係について考察する。

9. 「文化・芸術史」 責任者：江崎 聡子（神奈川大学・講） kesatoko@m2.gyao.ne.jp

テーマ：「明白ではないけれど遍在する危機を考える：戦争と例外状態のアメリカ文化史」

報告1：丸山 雄生（一橋大学）

報告2：清水 由希江（一橋大学・特別研究員）

今も続くアメリカの長い戦争はアガンベンの言う「例外状態」すなわち「緊急状態が通常の状態になるような状況」をもたらした。この分科会では、不明瞭だが常にどこにもあると煽られる危機に注目し、戦争が常態となった現在をアメリカ文化史に位置づけ、戦時と平時の曖昧な混合の意味を考える。アノミーとしての例外状態は、その対概念としての文化とは何かをも問うているはずである。

第一報告では、丸山雄生（一橋大学）が、継続的な戦争状態というアイデアの源泉として進化論の言説を再検討し、アメリカの映画や博物館に見られる進化論の受容と理解から、戦争と平和の区分を無効化する想像力を明らかにする。

第二報告では、清水由希江（一橋大学・特別研究員）が、アメリカの戦争の拡大を批判し、非戦の平和主義を唱えたウィリアム・ジェームズのプラグマティズムと反帝国主義から、例外状態下の社会構想への展望を示す。

10. 「アメリカ社会と人種」 責任者：藤永 康政（山口大学） yfujinag@gmail.com

報告：北美幸（北九州市立大学）「ユダヤ人の公民権運動への参加について：SCLC-SCOPE の事例」

新設の本分科会は、旧黒人史分科会を発展的に継承しつつ、「人種」を焦点にした議論を継続的に行うことで、研究者相互の意見交換の場となることを目指すものである。2000年代以後のアメリカ研究では、これまでの社会構築論に加え、批判的人種研究(critical race studies)、ホワイトネス研究などの提言をうけ、「黒人」を研究する土台が揺らいだ。他方、移民史をはじめとするそのほかの領域でも、エスニシティ・人種のカテゴリー自体を問いかける研究が相継ぎ、人種を問う分析の枠組みは著しく多層化・多様化している。ゆえに、今日のアメリカ研究において、特定の研究対象を超えて「人種」をひとつのテーマに、研究者が相互に意見を交換することの意義は大きいと思われる。第1回目の開催になるこの分科会では、まず北美幸氏から、1965年夏、南部キリスト教指導者会議が行った有権者登録運動に参加したユダヤ系アメリカ人の活動を中心に報告頂き、その内容に武井寛氏からコメントを頂いたあと、参加者を交えて広く意見交換をしていきたい。